

---

# ラスト・ラン

斉戒 新

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラスト・ラン

### 【Nコード】

N0723Z

### 【作者名】

斉戒 新

### 【あらすじ】

正治は製薬会社の正社員。

彼は家族を実家に残し、単身で一人暮らしを続けていた。家族と離れ、子供とも離れて、仕事に明け暮れる毎日。そこに僅かな変化が訪れる。

## プロローグ

八月十六日、父が初めて倒れた日だった。

夏用の下ろしたてのスーツが暑かった。長袖の黒い生地は陽の光をしつかりと吸収し蒸しかえり、そして首筋まで食い込んだシャツが窮屈さを感じさせた。手の甲で額を拭くと汗と脂のまじった水滴がべつとりと甲に塗りたくされる。正直、少し気持ちが悪い。エアコンの風量を強に切り替えて、ハンドルを握る手や顔に向けて噴射させる。

県内最も栄えた街中、九階建ての雑居ビルの一角に正治が通っていた会社はあった。通勤は車を使用し、片道一時間近くかけて毎日そこまで向かっていた。通勤ラッシュの時間帯のせいか、夜の混んでいない時間帯なら三十分でいけるところを倍近くかかってしまう。片道三斜線もある道をぎゅうぎゅう詰められた徴兵みたく、苛立ちを募らせながら皆同じ方角へと進んでいた。いつそ電車通勤に変えようかと、思案してみるけれど　　そういかなかった。

「おはようございます」

社内で契約している専用の駐車場に車を止め、仰々しいビルの入りに入ると、いきなり受けつけの若い女性が快活な声と共に煌びやかな笑顔で迎える。足を止めて、笑顔を返すわけでもなく、皆素通りして上へと向かうエレベーターの前へ向かう。もちろん、自分もその一人だった。笑顔を振りまいている彼女たちに対して何か特別痛ましい感情を覚えるわけでもない。彼女達もわかっているのだ、自分達がどういう境遇か　　そして、スーツを着たエレベーターを待つものも皆。

自分のことだけで精一杯なことを。

エレベーターは全部で六つ。右奥にあるエレベーターが上へと向

かう矢印が点滅すると、間もなくエレベーターがくることを示す。右手に持っているキャリアバックを握りしめると、全身が少しこわばった。そして同時に肘から手首辺りにかけて一筋の冷や汗がつたのを感じる。エレベーターの扉は間もなく開かれ、並んでいた人々はぞろぞろと吸い込まれるように中へと向かった。

エレベーター内のわずかな空間は一瞬にしてスーツ一色に変わる。ぎりぎりまで押し込まれた箱は密閉され、上へ上へと上昇する。各階にすべてに止まり、人が一人降り、そしてまたもう一人入ってくるこの繰り返しだった。階に止まるごとに扉が開かれると、中に立ち込めていた異臭やむさ苦しい蒸気が一気に解放される。が、すぐに扉が閉まると、再びわずかな空間に空気が立ち込めた。それを幾度と繰り返し返す。

九階ビルの七階、それが正治の事務所がある階だった。七階まであがると、最初の半分ほどは降りているので、すんなり降りることができた。エレベーターから降りてほぼ真正面、ガラス張りになった入り口には会社名が堂々と刻まれている。ビルの東側に位置した場所にその事務所は存在した。正治は一直線にガラス張りの自動ドアの前に立ったとき、ぽんと一つ肩を叩かれた。振りかえれば八つ下の後輩、新美賢介がにやにやと笑って挨拶をしていた。

「おはようございます、宮本先輩」

先輩、とわざとらしく強調し先に扉へと手をかける。すると、視界が少し広がると同時にけたたましい怒号がいきなり耳に舞い込んだ。

「宮本、新美、遅いぞ！ 朝礼始まるぞ」

「は、はいっ」

事務所の一番奥の席から課長がディスクの角にもたれかかったまま腕を組んでにらみつけた。血色の良い色黒で、短髪に切りそろえられた髪、顔はまだ朝にもかかわらず汗と共に顔の脂で光を反射させた。上品なグレーのスーツ上下に皺一つないシャツに身を包み、正治と同期にも関わらず、威厳すら感じる。

「す、すみません」

弁解する間もなく、恐る恐る中へと入ってゆく。まだディスクには人一人座っていないオフィスを抜け、奥にある更衣室へと二人は足早に向かった。丸いドアノブを軽く捻ると、もうすでに何人かの新社員が待機して、歓談で暇を持て余していた。二人が中に入ると、会話は途絶えびたりと顔を合わせ、目を丸くした。ほとんど間断なく、「おはようございます、新美先輩。宮本さん」と快活な声で挨拶をした。

「おはよう、浅井、津田」

新美が先んじて挨拶を交わす。遅れて、「おはようございます」と顔を合わせないまま小さな声で返す。すると、事務所の方から「おい、早くしろ！」と課長がドア越しに地響きのような声が伝わってくる。その場にいた全員は慌てて事務所の方へ向かう。少し出遅れて正治は向かうと、もう社員全員が課長と本部長の前に整列していた。「すみません」と軽く頭を下げながら列の一番端に並ぶと、またも課長からの激昂が正治へと飛んできた。

「宮本お！」

「はい、すみません」

つち、と舌打ちを一つすると、視線を逸らし一様に一同を一瞥した。全員がそろっていることが確認取れると、先ほどの怒鳴り声と変わらぬ声量で朝礼を始めた。

「おはようございます！」

課長は足元を直し、背筋をぴしっと伸ばし、まっすぐ社員達を見つめた。傍らでは本部長がディスクに片手もたれたまま立っていた。「では、はじめに…今月の営業は」

朝礼ではまず各個人の営業成績が発表される。今日はつき始めなので、ついでに先月の総合も一緒に発表された。名前を呼ばれると、その場で課長からじきじきにアドバイ스가これからの課題点をいくつか挙げられる。朝礼というのは名前だけで、内容は個人に対しての営業の催促に過ぎない。

「…もと、宮本！」

「……は、はい」

課長の鋭い眼光がしっかりと射抜く。手に持っている資料を一読するまでもなく、いきなりしかりつけた。

「下から二番目だぞ？ 下は新人の浅井だけ。しかも、先月と併せて新規一件だけ。これはどういうことだ？」

「あ、…はい」

「はい、じゃないだろ…ちゃんとやっているのかと聞いているんだ！」

課長が深いため息をつく。

「…はい」

視線を床に落とす。スラックスから飛び出ている革靴がもう薄汚れているのが見える。歯を強く食いしばり、ぎゅっと、ズボンごと両手を強く握りしめる。

「もういい」

課長があきれてこの話を無理やりにも終わらせた。視線を上へと上げる。課長はもう次の話に移っていた。もう目さえもあわせようとしなかった。

胸の奥に秘めた煮えたぎらない思いをこのときは必死に抑えようとするしかなかった。俺だって、俺だって…真剣にやっているのに。

「新美先輩すごいっすね〜、二ヶ月連続トップじゃないですか！」

「いやいや。あんなのまぐれだって」

新美の視線は机に注いだまま、口だけで答えている。

「そんなことないですって！ 今度コツとか教えてくださいよ〜」

「コツう〜？」

新美がちらりと正治をみる。瞳孔は光も通さないくらい黒く、そして新美は口角を軽く吊り上げた。

「こんなの経験だって。経験積みめば誰にだってできるよ〜」

にやにやと人をあざ笑う顔でこちらをずっと見ている。「そっす

か、経験つすか」と周りにいる浅井と津田は頷く。

「じゃ、営業いつてくるから！ 頑張れよ、二人とも」

「はい！」

新美は両手に資料を持ったまま事務所から出てゆく。早くいかな  
いとな、と思いつつ正治は机にある今日の分の資料をまだ整理して  
いた。こればかりはしつかりと考えないといけなかった。一日で  
三十件近く回るので時間のロスはあまりできないからだ。卓上では  
どちらにしようかときめかねていた。すると視界の上方から頭が二  
つ入った。

「あ、宮本さん。お先です」

「お先つす」

浅井と津田はもうルートをきめたようで、行く準備万端で両手に  
資料を抱えていた。

「おう、がん」

「宮本さんもがんばってくださいね」

「…あ、…うん」

それじゃあ、と二人は足早に仲良く出て行く。二人が出てゆく様  
を正治はその背中を見つめた。視界が一瞬ぶれ、強い光を浴びたと  
きのように目がちかちかと光彩を放つ。

結局、正治が事務所を出たのは営業の中でも一番最後だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0723z/>

---

ラスト・ラン

2011年12月2日20時56分発行